

(七) 激流

ジークフリード・キルヒアイスが独立した部隊の将として一軍の指揮を執り、その功を讃えられて初めて皇帝の謁見を賜ったのは帝国暦四八七年五月初旬。ヤン・ウエンリーによるイゼルローン要塞失陥が帝都を震撼させる直前のことである。

「カストロブ公領における卿の武勲は、大いに宸襟を安んじ奉った。見事な武勲よと陛下には御感ななめならずあらせられる」

皇帝に代わって双頭鷹武勲章を彼に授け、併せて中將への昇進を告げたのは國務尚書リヒテンラーデ侯爵である。まだ一介の少将でしかなかったキルヒアイスに、皇帝からの言葉はなかった。フリードリヒ四世が、式典の冒頭、わずか数分だけ姿を見せ、すぐに退席したことに、不満も屈辱も感じなかった。

——あれが皇帝。

アンネローゼを彼らの許から拉し去り、今も黄金の鳥籠の中に取り込めている男。苦い憎悪と侮蔑の感情はラインハルトと同じくするところだった。皇帝に向ける視線から瞋恚を拭うことはできず、不逞な視線を見とがめられるのではないかとそちらの方が気になったほどだった。

「なお一層、皇帝陛下に対して忠誠の限りを尽くさんことを卿に望むものである」

リヒテンラーデ侯爵の言葉は、キルヒアイスの神経を強かに逆撫でた。論外もきわまりなかった。彼の忠誠は、一にかかつてラインハルトに、ひいてはアンネローゼにのみ向けられたものである。そのアンネローゼを奪い、ラインハルトの憎悪を買った男に忠誠など向けられようはずもないではないか。

唯一、キルヒアイスが素直に歓迎したのは、アンネローゼの居

館への訪問を許されたことだった。無論、ラインハルトの同行が条件だが、当日のラインハルトは宮中の別の行事に参加する用事が入っており、一時間ほど遅れるという。

「気にするな。先に行つて、姉上にカストロブとマリィンドルフの話でもして差し上げてくれ。姉上はここから離れたことがないからな。いい話題になるぞ。必ず後から行くから、姉上のケーキを一人で平らげるんじゃないぞ」

およそ帝国元帥らしからぬせりふで、ラインハルトはアンネローゼの許への単独行を許してくれたのだった。

予め、ラインハルトが遅れて行くという知らせは入っていたから、一人で訪れてきたキルヒアイスを出迎えるアンネローゼの表情に不審はなかった。

「お祝いを言わせてね、ジーク」

ラインハルトが怒るといけないから、今日の新作のケーキはラインハルトの顔を見てから出します。珍しく悪戯っぽい口調で前置きしたあとの、アンネローゼの最初の言葉がそれだった。

「ありがとうございます、アンネローゼさま」

何と言つて、アンネローゼの言葉に応じればいいのか、キルヒアイスは言葉の選択に窮する自分を感じていた。勲章を頂きました。もう中將になりました。一人でやれるのかと思いましたが、何とか無事に任務を果たすことができました。

いくつかの応答が胸裡を去来した中、彼が選んだのは最も単純なフレーズだった。

「ラインハルトさまのおかげです」

アンネローゼがちょっと眉を寄せ、それからゆっくりと頬を緩めた。

「無事に帰ってこられて良かった。ラインハルトは絶対に大丈夫だと言っていたけれど……」

何がなし、ほっとする思いがキルヒアイスの胸を流れた。功績を自慢するようなことを言わなくて良かった。戦功よりも、彼の無事を願っていたくれたらう彼女に、手柄自慢は余りにも無神経な行為に思われたのだ。

香ばしいコーヒの香りと、一〇年前とほとんど何も変わらないう会話がキルヒアイスの心を和ませた。

気付いたのは、この一〇年、アンネローゼとただの二人だけで会話を交わした記憶がほとんどないことだった。一〇年前、彼らがまだ市井の少年少女であったころには何度かあったのかも知れない。しかし、まだ二〇代にさしかかったばかりのキルヒアイスにとつても、一〇年前の記憶は薄い紗のベールをすかし見るように曖昧に霞んで見えていた。

キルヒアイスの視線がアンネローゼの表情に吸い寄せられていくのは、むしろ当然なことだった。同時に、数年前、リーフェンシュタール子爵ヴィンフリートにずばりと言いつけられた一言：『卿が伯爵夫人に惚れている、などとは言わぬが……』が蘇り、彼の胸に抑え切れぬ痛みを思い出させる。

同時にキルヒアイスは思う。取り返しのつかない過去のみを思い悩むことはしない。自分は、この女を自分にとつてのただ一人の女と思ひ定めたのだ。そのことを決して後悔していない。後悔するような人生を送りたくない。たとえ、アンネローゼが想いに答えてくれる日が来なかったとしても。

ただ、キルヒアイスには気になることがあった。

「アンネローゼさま」

「なに、ジーク？」

「お身体の具合がどこか良くない、と言つことはありませんか？」

ラインハルト

弟、それよりも色の濃い、碧い目が大きくなる。

「どうしたの、いきなりそんなこと？」

僅かな躊躇いが小さな堰となつて言葉を遮った。

気付いたのは二年前。同盟軍の前回のイゼルローン攻撃迎撃に出撃する前に会った時だった。後宮に入ってからこの方、アンネローゼの視線がキルヒアイスの隣家に住んでいたころの明るさを持つことはなかった。ラインハルト達との談笑の最中でさえ、ふと視線が沈むことが多かった。

正確には視線だった。以前は正面から彼の目を見て微笑んでいた視線が、さりげなく、あるいはぎこちなく逸らされるようになったのが、ここ一、二年のことだった。

そう言えば、前回、アスターテから帰った直後に会ったとき、口実を設けてラインハルトに席を外させた時のアンネローゼの表情には微笑がなく、透き通るような哀しみに似た色合いがその目の中に揺らめいていた。

「ジーク、ラインハルトのことをお願いします」

あの時、その言葉を口にしたアンネローゼは、まるで激しい苦痛に耐えているような、そんな口調ではなかったか。何がそれほどまでに彼女を苦しめ、悲しませていたのだろうか。

今も、アンネローゼは、彼の視線を正面から受け止めかねるように、苦しげに視線を彷徨わせてはいないだろうか。

それが、あの皇帝。豪奢な支配者の衣装を纏った、それでいて内実はまるで抜け殻でしかないような、あの老人であるとすれば……

時よ、早く流れてくれ——真剣にキルヒアイスは思った。ラインハルトは、あと一、二年の内と言った。短くともあと一年！アンネローゼに、今の境遇を耐えて貰わなければならないとすれば、その時を一分でも一秒でも縮めたい。

「その…何だか、お顔の色がよくないなと」
上手い言い回しを思いつかなかった。

「え——？」

「どこかお悪いなら、早めに侍医に診ておもらいになった方が良いのではないかと」

「…そう？ そうね…ええ、でも気にしなくて良いのよ、ジーク。ちよつとお化粧を変えたの。それで顔色が変わって見えるのではないかしら」

この女は嘘が下手だ…明らかに彼女は応答に詰まり、口にする言葉を探していた。それに、幾らキルヒアイスが女性の化粧に疎くとも、彼女の顔を沈ませているのが化粧品の効果でないことくらいは分かる。何しろ、気付いてから二年近く。彼自身が口に出して問うのを躊躇い続けたのだから。

しかし、アンネローゼが否定する以上、それを問いつめる意思はキルヒアイスにはない。彼にできることがあるとすれば、ラインハルトの覇業が達せられる時を一刻でも早めるために、持てるすべてを捧げ尽くすことだけだ。

「そう言えば、ラインハルトが言ってきたわ。今度は何もかも任せたと。本当に？」

「ええ。何も指示は頂きませんでした」

アンネローゼが話題を変えたことに、キルヒアイスはむしろ感謝した。

無論、アンネローゼの健康に関する懸念は消えていないし、等閑視するつもりはなお無い。それが普通の病気ならともかく、キルヒアイスが恐れるのは他者の意思が背後に働いているケースだったから、場合によっては一瞬の対応の遅れが致命的な結果をもたらしかねない。

差し当たり注意を喚起すべき相手は、執事のコルヴィッツ夫妻

と…あとは女官長補佐のあの女性。エメラルド・グリーンのきつい眼差しに、微かな苦手意識を呼び起こされながらもキルヒアイスは心を決める。これはやらなければならぬことだから。あとでラインハルトさまが来られたら、言い訳を作つてちよつと席を外せばいい。

無論、それだけでは不足でラインハルトにも相談し、策を打つておく必要がある。例えば、アンネローゼの侍医、最近西苑に雇用された侍女の身辺を調べ、疑わしい人間を洗い出す…など。

アンネローゼは、ラインハルトがキルヒアイスに何の作戦指示も与えずにカストロブ公爵領へ送り出したことに本気で驚いているようだった。

「ひどい子ね、ジークを一人で送り出すなんて…」

「そんなことはありません。私もいつまでもラインハルトさまのご指示を受けて動くだけの人間ではられませんから」

これまでラインハルトの周囲の人間に対し、キルヒアイスは唯一の基準で接してきた。これはラインハルトに役立つ人間か否か…と。自分自身が例外であるはずはない。カストロブ公の乱を単独で鎮められなければ、それは自分がラインハルトの役に立てぬ人間だと言うことだ——そう決意してカストロブ公爵領へ赴いたキルヒアイスだったのだ。

「でも、ジーク一人を危ない目に遭わせたのでしょうか？ ラインハルトには後で文句を言っておかなければいけないわね」

「でも、アンネローゼさまも仰いました。私はもつと自分を評価すべきだ、と。ラインハルトさまは私を信頼して送り出して下さったのですし、それに応えられないとすれば、悪いのは私です。ラインハルトさまの責任ではありません」

サファイア色の瞳が数瞬の間だけ彼の視線を捉え、それからふつと逸らされた。

「そうね。確かにあなたの言うとおりですね、ジーク」

それにしてもラインハルトさまは遅いですね。言おうとして、キルヒアイスはすでに一時間余りが過ぎていることに気付いた。アンネローゼと席を共にしているとき、時は何と早く流れすぎていくことだろう。皇帝の御前や、ラインハルトへの敵意と悪意に満ちた艦隊司令部や軍務省の会議では、秒針がその位置に固定されて動かぬようにさえ見えるというのに。

近づいてくる、地上車のものらしい微かなエンジン音をキルヒアイスは耳ざとく捉えた。

「いらつしやうたようですね、ラインハルトさま」
「そう？ ジークは耳が良いわね」

ほつとしたような口調がほんの僅か、アンネローゼの声に混じるのをキルヒアイスは聞き逃さなかった。やはり、彼女は彼らに、特にキルヒアイスに明かすことのできない何かを心の裡に抱え込んでいる。それが何かは分からなかったが、もはやラインハルトに黙っている時期でないことは確かだった。

この時、キルヒアイスの不安はひたすらアンネローゼの健康に向けられていた。だからこそ、彼女の一拳一動に過敏なほどの注意を注いだのだが、逆にそれゆえにこそ、彼は見逃していた。アンネローゼの耳朶の不自然なほどの紅さを――

「イゼルローンが陥とされた」

開口一番、ラインハルトの言葉は驚愕となってキルヒアイスの聴覚を痛打した。

「イゼルローンが……ですか？」

そこがアンネローゼの居館のサロンであることを、キルヒアイスも一瞬忘れていた。鍛え抜かれた武官の反応で椅子から躍り上

がった。

「五月一四日だそうだ」

左掌に右拳を打ち当て、ラインハルトはうなり声を上げた。

「あいつだ。あいつの仕業だ」

「ヤン・ウエンリー准将？」

「少将……いや、今頃はもう中將になつてゐるだろう……詳しいことは分かつていないが、ゼークト大將もシュトックハウゼン大將も戦死したか、もしくは叛徒の捕虜になつたか……いずれにしても帰つてはこないようだ」

「駐留艦隊はどうしたのでしょうか。全滅ですか？」

「いや……」

金色のたてがみが緩やかに光をはらみ、左右に広がった。

「全兵力の一割を失い、アムリッツアまで退却してきたらしい」

「一割……ですか？」

大規模な作戦行動を起こす際、『計算済み』の損害として許容されるのは全兵力の三割。三割の兵力を失った部隊は壊滅的打撃を受けたとして前線からの後退を命じられるのが普通だった。やむを得なければそれでも戦闘を継続させる場合もあるが、損害が五割に達した時点で、その部隊は『全滅』したと見做される。実際には、その前に部隊は潰乱し、戦線は崩壊しているのだが。

帝国軍最大の要衝であり、国防の最前線であるべきイゼルローン要塞。その要塞の防衛の要とも言つべき駐留艦隊が一割の損害で要塞を放棄し、戦線を離脱するなど、通常は理解しがたい状況と言えた。

「あのベテン師め、どんなトリックを使ったのか……」

「どうしたの、ラインハルト？ イゼルローンの要塞が陥とされた、と言つたの？」

「あ、姉上……済みません」

姉の前で政治と軍事の話はしない——キルヒアイスとの間での不文律を破っていたことに、ラインハルトははじめて気づいたようだった。

アンネローゼも政治・軍事とは意識して大きく距離を取っているが、イゼルローン要塞の名を知らないほどの軍事音痴でもない。その要塞が叛徒・自由惑星同盟の手に移ることが何を意味するか、という点についても十分な知識と想像力を持ち合わせているはずだった。

大きな歩幅でドアからテーブルまでの距離を詰めたが、ラインハルトは椅子を引こうとはしなかった。

「ええ、イゼルローン要塞を叛徒に奪われました。宮中も軍務省も大騒ぎです」

アンネローゼが淹れてくれたコーヒーを、ラインハルトは行儀悪く立つたまま口に運んだ。

「残念なんです、艦隊司令部から緊急の召集がかかっています。すぐに行かなければなりません」

「そう……せつかく来てくれたのに……」

心底落胆した口調でため息をつき、アンネローゼは改めて、自分よりも頭一つ以上高くなった弟とその親友に交互に視線を送った。

「五分くらいなら待てるわね、ラインハルト？」

「ええ……待てますが？」

そのまま待つようにと言い置いて居間から立ち去ったアンネローゼが戻ってきたとき、その手にはケーキを詰めたバスケットが提げられていた。

「わたしひとりでは食べられないから。食いしん坊さんが二人も来ると思っ、大きめに作ったのよ。責任を取って、ちゃんと食べてね」

「夕食を抜いてでも」

ちよっとおどけた口調で言い、ラインハルトは姉からバスケットを受け取る。アンネローゼはもう一度、ふたりに交互に視線を注いだ。ラインハルトには、相変わらずやんちゃで手のかかる弟を見る目で、そして、キルヒアイスには、それがどういう意味なのか、キルヒアイスにも完全には分りかねる頷きを込めて。

「何があっても、無事に帰ってくるのよ。それが、わたしにとって何よりも嬉しいことなのだから。忘れないでね」

「ご心配には及びませんよ、姉上」

「心します、アンネローゼさま」

「伯爵夫人の健康状況？」

金茶の髪が左右に大きく振れた。

キルヒアイスがアンネローゼの健康についての危惧を手短に説明すると、ラインハルトは一瞬激怒した。怒りはもちろんキルヒアイスではなく、最愛の姉に危害を加えようとしている……かも知れない……想定上の敵に対するものだったが、執事と女官長補佐のもとへ立ち寄りたいたとするキルヒアイスの提案に、彼自らも同行すると言い張ったのだ。

キルヒアイスは、しかし、ラインハルトを思いとどませた。確かに重大事件だったが、イゼルローン要塞失陥はすでに確定した事実である。キルヒアイスが、今夜、艦隊司令部にいようとしようまいと、イゼルローンの奪回が永久的に不可能になるはずもない。ただし、ラインハルトについては出頭の遅れがそのまま敵に攻撃の材料を与えることになる以上、寄り道は不可能だ……と。

「分かった……話は今夜聞く」

ラインハルトはキルヒアイスの主張を受け入れたが、蒼氷色の

眸には雷光をはらませたままだった。
「至つてご健康です」

ローエングラム元帥府副司令官と言えども、グリューネワルト伯爵夫人の健康状態についての情報を要求する権限はありません。最初、西苑女官長補佐を務めるシュミットバウアー男爵夫人からのにべもない回答だった。

無論、その程度の門前払いで引き下がるキルヒアイスではない。ローエングラム元帥府に連絡をつけると、ローエングラム伯爵・元帥の名前で、姉の健康状態に不安あり、女官長府の責任に於いて調査されたしとの公式文書を送ってきたのだ。

「ローエングラム元帥府は帝国で最も効率のいい官僚組織なんですよ」

シュミットバウアー男爵夫人コルネリア・ゲルトルーデは、口調に僅かに皮肉のスパイスを含ませたが、公式の要請には公式の立場での回答を返してくれた。期待した以上に詳細を極めた内容だったことに驚き、キルヒアイスは同時に、アンネローゼが彼女を指して『公私の別に厳しい』と評した意味を初めて理解した。
「見ておわりの通り……いいえ、わたくしが説明しても無駄でしょうから、専門の医師にお見せ下さい。伯爵夫人が、少なくとも肉体的には至つてご健康だと言つたことを、どんな医者でも証言してくれるはずですよ」

「少なくとも肉体的には？ どういう意味ですか、男爵夫人？」
「文字通りの意味です。それ以上でもなければそれ以下でもありません。申し訳ありませんが、お約束の時間が過ぎています。お引き取り頂きますでしょうか、キルヒアイス中将閣下？」

その夜遅く、コルヴィッツ夫妻からも連絡があった。少なくともこの二年余り、アンネローゼ付きの侍女は入れ替えがなかった。コルヴィッツが虚偽の報告をしている可能性もゼロではなかった

が、彼の宮廷での地位はアンネローゼを市井から見いだしたことで、フリードリヒ四世のアンネローゼへの寵愛が一〇年にもわたつて衰えないことに由来している。彼がアンネローゼの不利をを図る理由はなかった。少なくとも今の時点では。

遅くなつてシュワルツェン^{シュワルツェン}の館に戻ってきたキルヒアイスの報告を、ラインハルトは双眸の雷光を消さないままに聞き入つてた。

「キルヒアイス、明日、皇帝と会う。お前も一緒に来い」

「皇帝陛下に？」

「ああ。帝国軍三長官の老將^{おいぼれ}どもが揃つて辞表を出したらしい。多分、俺にどの地位がほしいか、などと訊くつもりだろう」

「辞退……なさるおつもりですね、ラインハルト様？」

「そうだ。今は元帥府の中を固めることと、あと姉上の安全を確保すること。この二つに専念したい。今、中途半端な地位を受けて、雑用に縛られたくはないからな。連中が帝国領へ侵攻しようなどと馬鹿な考えを起こさないなら、イゼルローンなど、しばらく同盟の連中に預けておけばいい。慌てて奪回の兵を起こしたところで、同盟の連中が六度繰り返しした愚行をそのままなぞる羽目になるだけだからな」

「アンネローゼさまのことは？」

「気は進まないが……この際、皇帝の力を借りるのも仕方がないかも知れない。せつかく向こうから呼び出してくれたんだ。今のところ、姉上の安全を完全に保証できるとしたら、皇帝以外にないからな」

口にするのも忌々しいという調子で吐き捨て、最後にラインハルトは付け加えた。噂だが、ここしばらくフリードリヒ四世が病臥することが増えているらしい。しかも、それが決まつてアンネローゼの館なのだという。

「老いぼれた挙げ句に姉上に看病してもらいたくて、ささいなことでも大げさに言い立ててるんだろうさ、あの…」

さすがに皇帝への悪罵は飲み込み、キルヒアイスにはアンネローゼの健康状態に関する資料は念入りに破棄して、早く休むように命じる。当初、シュミットバウアー男爵夫人コルネリアへの疑念を捨てきれないラインハルトだったが、彼女の態度はさすがにラインハルトの猜疑をも緩めさせるに十分だったらしい。

少なくとも肉体的には至って健康：自分がコルネリア・ゲルトルーデの、その言葉に引っかかりを覚えた原因に、キルヒアイスがいちいち当たったのは、翌日の明け方だった。

ベッドの上に起きあがり、キルヒアイスは朝まだきの薄闇に目を凝らした。

コルネリア・ゲルトルーデはヒントを与えてくれたのだ。

「『肉体的には健康』だったら、ひっくりかえしたら『氣に病んでいることがあるらしい』の意味じゃないか…」

それとラインハルトが何気なく漏らした皇帝の病臥の多さが無関係とは思えない。アンネローゼは、皇帝の病臥の頻度が増えること…つまり、皇帝が健康を害し氣味であることを案じているのではないのか。

嫌だったが認めざるを得ないのは、今のアンネローゼにとってフリードリヒ四世が最も近くに侍する人物であること。アンネローゼが、身近な人物に対しては分け隔てなく真摯に氣遣いをする人柄であることだった。つまりは、彼女が氣に病まねばならぬほど、皇帝の心身の衰えが進んでいると言うことではないのだろうか。

アンネローゼの白い、優しい手が、彼女の氣遣いに値しない男

の額に置かれていると想像するだけで、心地よい初夏の日差しすら一氣に翳ってしまうような不快さに囚われる。その上、アンネローゼ自身が心労でそれと分かるほどに健康を損ねかけているのだ…

吐き気をすらともなった疑惑だった。それが明瞭な言語となつて脳裏を占拠する寸前、彼があらゆる精神的な努力を集中して、それを押し込め、不分明な不安と疑惑のままで胸の奥へ押し込めた。カストロプ星域で初めて数千の艦隊を指揮した時でさえ、穏やかな微笑みを崩さなかつた赤毛の若者でさえ、今、胸の中に唐突にわき上がった疑問と真正面に向き合う勇氣は持ち合わせていなかったのだ。

「アンネローゼさま…まさか…」

大きく頭を振り、ベッドサイドの灯りを付ける。時計は夜明け前の時を告げていたが、もう一度眠りに就く氣分は消え果てている。

ここは思い切つて起き出すしかない…そう決めた瞬間に、キルヒアイスはぎくりとして身体を強ばらせた。

すでに三〇年の余を閲してきたフリードリヒ四世である。その彼が俄に心身の衰えを周囲に見せ始めていると言ふことは…噂だけではなく、アンネローゼが皇帝の病臥を氣に病むほどの状態であるとするれば…

「ラインハルトさまにお伝えしなければ…」

ひとりごち、キルヒアイスは思い当たったことに感謝した。これまで内外に確立した勢威をもつて皇帝を打倒し、玉座から追い落とすことだけを考へてきたが、自然死によつて皇帝が彼らの前から姿を消すという事態も、今後の選択肢の中に入れておく必要があるに違いない。

ことが政略に通じることであれば、これは、彼とラインハルトとでどのようにでも解決を見いだすことのできる領域であつた。それがどれほどに困難な課題であつたとしてもさしたる困難とは感じられなかつた。アンネローゼが、あるいは眞摯に皇帝を愛しているのではないか、などという疑惑と正面から向き合うことを考えれば、遙かに――

キルヒアイスの胸裏に一度兆した疑惑は、こうして再び形を失つて彼の心理の奥深くに沈んでいった。それが再び形を得て蘇り、今度こそキルヒアイスが正面から向き合うことを強いられるまで、さらに二年の時が必要だつた。

「リヒテンラーデ侯と手を結ばれるが宜しかろうと考えます」
義眼の光が白っぽかつた。

パウル・フォン・オーベルシュタイン。イゼルローン要塞駐留艦隊旗艦の唯一の生き残り。ラインハルトが帝国軍三長官の地位を辞したのと引き替えに、敵前逃亡の訴追を免れさせ、ローエングラム元帥府に准将・参謀長として迎え入れた人物である。

オーベルシュタインは既に、ラインハルトたちがゴルデンバウム王朝打倒を目指していることを知っている。ラインハルトが『今後の我が国の政治体制についてどう思うか』と試問したとき、オーベルシュタインは平然と応じたのだ。『ゴルデンバウムの王朝はすでに存在自体が帝国の害毒となつております。帝国が生存するためには、ゴルデンバウム王朝は滅びねばなりません』と。

「国務尚書と……か？」
「リヒテンラーデ侯は自身の勢力を持っています。候の勢威は

一にかかつて皇帝陛下よりの信任に基づくもの。皇帝陛下の存在を欠けば、門閥貴族達の勢力に対峙し得るだけの力はありません」
「従つて、有能な番犬を欲している、と？」

「焦る必要はないでしょう。皇帝陛下の健康に不安が生じているのであれば、候からの応答も早いでしょうし、そうでないとすれば手を携える用意があると伝えておくだけで、元帥のお名前が候の選肢の中に入ります。後は元帥ご自身の実績が、候の判断を左右するだけのこと。元帥のご許可を頂ければ、小官が自ら候とのコンタクトに当たりたく思います」

オーベルシュタイン自身、平民には望みもつかぬ高価な義眼を常用品として調達できるレベルの有力貴族出身である。公のルートはともかく、私、あるいは裏のルートでリヒテンラーデ侯に接触するすべについては、ラインハルトやキルヒアイスよりもはるかに豊かな選肢を持つている。

ラインハルトは即決した。

「いいだろう。卿に任せる……それと、もう一つ、例の件だ」

「格好な人物がみつかりました」

「アーサー・リンチ……か？」

オーベルシュタインが差し出したファイルを、ラインハルトは厭わしげに一瞥し、すぐに執務デスクに放り出した。対同盟の攪乱工作。基本的なアイデアはラインハルトが出し、キルヒアイスが大まかな計画を立てたが、細部の、謀略に類する部分がオーベルシュタインに諮問されていたのだ。

「酒浸りの破廉恥漢ですが、同盟軍内部にはそれなりの人脈を持ち、何よりも一度はヤン・ウェンリーの上官であつた経験があります。抜kindでた実績を上げた、かつての部下への嫉妬は、自らの裏切り行為への絶好の免罪符となります。本来なら、あれは自分の功績だつたはずだ、やつはそれを不当に盗んだのだ、と」

「一人か？」

「いいえ。全部で五五名をピックアップしました。こちらはフェザン經由で帰国させます。リンチと行を共にするのは最大でも五名以内。それ以上ですと、名簿に疑惑をもたれてしまいます」

「了解した。着手しろ。リンチの方は私とキルヒアイスで処理する」

「かしこまりました」

退出しかかるオーベルシュタインを、ラインハルトが止めた。

「キルヒアイス中將から叛徒どもの動きについて報告がある。同席し、卿の意見を聞かせてくれ。キルヒアイス」

「はい。イゼルローン回廊宙域の哨戒部隊からの定時報告です。イゼルローン要塞周辺宙域に大量の輸送船団が到着しつつあります。単なる要塞の補修や、駐留艦隊用の補給物資では説明できない量とのことです」

「どの程度だ？」

「少なくとも、数個艦隊を一挙に動かし得る戦略物資が既に運び込まれたと、情報部では見えています。それだけではなく、さらに後続の補給部隊が同盟各地から要塞へ向かっていると。これは、フェザン經由の情報ですので今ひとつ確度に欠けますが」

「同盟軍は帝国領への侵攻作戦を考えているようですね。それも数個艦隊。あるいは一〇個艦隊レベルを動員しての」

オーベルシュタインのコメントは簡潔だった。

「卿もそう思うか？」

「確か。同盟では選挙と称する政治イベントが近づいているはず。それに、現在の同盟の政治担当団体の支持率は極めて低い水準で推移していると聞いております」

『同盟に於ける政権支持率と出兵回数との比例関係に関する一考察』と題する士官学校学生の論文を、キルヒアイスも読んだこと

があった。内政の実を上げられない政権への支持をとりつけるために、莫大な国費を費やして出兵を行い、数百万の死屍を戦場に積み上げる。同盟の政権担当者の精神の退廃ぶりに嫌悪を覚えた記憶は新しい。

「どう対抗すべきだ。卿の意見を聞きたい」

「三つの選択肢があると考えますが、元帥閣下にとつて最良の方針は、この機を捉えて同盟軍に回復不可能な軍事的打撃を与えておくというものです」

「ほう……」

面白そうに、ラインハルトは目を煌めかせる。キルヒアイスも興味をそられて身を乗り出した。先日、同盟軍による侵攻の可能性を論じたとき、ラインハルトとキルヒアイスの達した結論は二つの選択肢だった。一つはオーベルシュタインと同じく同盟軍を帝国領深くへ引き入れ、後方を遮断すると同時に帝国軍の全兵力を上げてこれを叩き、壊滅的打撃を与えるというもの。今ひとつは水際撃退作戦で、イゼルローン要塞出口に迎撃のための縦深拠点を構築し、回廊から出てくる同盟軍を封じ込め、要塞へ追い返すというもの。

二人が出した結論は前者だった。

前者は同盟からの脅威を一挙に除き得る点で有利な一方、おそらくは総兵力の過半を動員するであろう同盟軍に対して正面から戦えば、帝国軍も少なからぬ損害を蒙る恐れがあった。後者は味方の損失は軽くて済むだろうが、同時に同盟軍への打撃も小さく、侵攻作戦が長期にわたって継続される恐れがあるという難点があった。いかに拠点を盾にするとは言え、イゼルローン要塞並の防御施設を構築するのは難しい。長期にわたる攻防戦を続けられ、防禦を強い続けられる帝国軍側の士気の衰えや、主導権を敵に握られていることの戦略上の選択肢のなさも考えに入れる必要が出

てくる。

「あと二つの内の一つは、回廊出口での水際撃退作戦だな。今一つは何だ？」

「同盟軍に帝国領深部……さようですな、場合によってはヴァルハラ星系まで侵攻させます」

「同盟の手で帝国を倒させるといつのか？」

「あるいは帝国の過半を同盟に占拠させ、同盟が統治に失敗するのを見計らって、閣下の手で帝国領を回復される——というやり方も可能でしょう」

「そう簡単には行かない。同盟が必ず統治に失敗するという保証もないし、その時期にしたところで統治の誤りが結果として現れるのに一〇年はかかるだろう」

「小官の見るに、二年はかかるまいかと思いますが……同盟は民主主義と称する政治体制を信奉しており、これが政治体制上の至高の形と信じております。当然、彼らは占拠した帝国領に同じ形での統治を布こうと試みるでしょうが、帝国国民は民主主義などというものは知識の上だけでも知りません。彼らにとっての第一義は今日生きることなのですからな。占拠された宙域に対して帝国は統治の義務は負いません。同盟の責務となります。同盟の国力では、帝国領の四分の一も領域が広がれば、一年と耐えきれずまい……が、閣下には二年でも長すぎる、のではございせんか？」

「卿の意見は面白いが、確かに二年では長すぎる。いいだろう。キルヒアイス、第一案を基本に作戦計画立案策定に着手だ。オーベルシュタイン、卿には我が方の損失を抑えるための作戦立案を命じる」

直ちに退出するキルヒアイスを横目に、オーベルシュタインがラインハルトに時間の猶予を求めたのはその時だった。

グリユーネワルト伯爵夫人のことです……前置きされた話題に、

ラインハルトの眉が陰しくなった。

「オーベルシュタイン、卿に姉上のことを案じて貰う必要はない」

「そうではありません、閣下」

キルヒアイスの背がドアの向こう側に完全に消えるのを、オーベルシュタインは確認しようだった。

「閣下にお尋ねしたいのです」

「何をだ？」

「閣下にとっての優先順位をです」

「優先順位？」

「さよう、閣下にとって、現在のゴールデンバウム王朝体制を過去のものとする……と、姉上のグリユーネワルト伯爵夫人の御身柄といずれが優先されるべき事項なのかをご確認頂きたい」

「何だと？」

ラインハルトは理解する。オーベルシュタインは問うているのだ。万一、アンネローゼを犠牲にしなければ、一切が瓦解する……たとえば、ラインハルト自身が旧勢力によって処断される、あるいは彼らとの戦いを永久に放棄せざるを得なくなる。そんな局面に際会した場合、ラインハルトはいずれを採るのか。アンネローゼを犠牲にして、ゴールデンバウムによる帝国の支配に終止符を打つか、それともあくまでアンネローゼを優先し、ルドルフの残映に支配者としての存続を許すのか。

「出過ぎるな、オーベルシュタイン。いつ、卿にそのようなことを考えろと命令したか」

「ご命令は頂いていませんが、策を練る者として伯爵夫人の存在は無視しがたいのです。小官は当然、体制の変革を優先してものを考えます。しかし、実施において閣下と意見が食い違ったのは、話になりません」

「……」

「いかがでしょうか？」

ラインハルトは思わず歯を食いしばった。彼個人で言えば自明だった。姉アンネローゼを老醜の皇帝から取り戻す。それが第一義であり、極論すればゴールデンバウム王朝の打倒はそれに付随する付属物ではない。今の今まで、両者は、ラインハルトの中では車の両輪のように寸分の矛盾も来していなかった。が、オーベルシュタインは両者が真つ向から対立する局面を無造作に決りだし、ラインハルトの目前に放り出して見せたのだ。

ゴールデンバウム王朝を倒したとしても、そのためにアンネローゼが犠牲となり、彼とキルヒアイスのもとへ戻ってこないとするれば、何の意味もない。しかし、アンネローゼの生命のために皇帝や門閥貴族の前にひとたびでも膝を屈すれば、オーベルシュタインを初め、彼の許へ参集しつつある若手の軍人達、その多くは皇帝と門閥貴族の支配に飽き飽きし、新たな風をラインハルトに求める者たちだ。その彼らの支持は二度と取り戻すことはできない。

「卿に私がそのようなことを答えねばならぬ謂われはない」

「お答えを頂けませんか？」

「オーベルシュタインは大きいため息をついたようだった。

「まだ、お分かりになりませんか。政治と言い、政略というものは、しばしば最も採りたくないものとそれと同程度には拒みたいもののいずれかを選ばねばならない、そういう選択の連続であるということに？ あれもこれもではありません。あれか、これかなのです」

「一つだけ言うておく。私は軍人として栄達を望んだ。理由は一つだ。私は嫌いな奴の命令を聞きたくなかったのだ」

これでこの話題は終わりだ——断ち切るようなラインハルトの言葉に、オーベルシュタインは敬礼で応じた。ラインハルトの

政治家としての未熟さは受け入れたいが、最後の言葉だけは理解したと言わねばかりだった。嫌いな奴の命令を聞きたくない。アンネローゼの生命を全うできても、彼女がなお皇帝の軛にあり、それゆえに皇帝や皇帝の威を借る大貴族どもの命令を受け入れねばならないくらいなら……と。